

【研究室訪問：第8回】  
 (財)東京都老人総合研究所  
 生活環境部門 室長 溝端光雄



溝端光雄室長

1.はじめに

東京都老人総合研究所は、老化・老人病・老人問題について自然科学や社会科学の立場から総合的に研究するわが国初の研究所として、昭和47(1972)年に設立された都立の研究機関です。その後、高齢者の問題が多様化するに伴い、自由な研究活動を活性化するため、昭和56(1981)年に財団法人化され、今年で27年目を迎えます。生物学・免疫学・精神医学・保健学・栄養学などをベースとする32の研究部門と事務部門を擁し、合わせて約180名の職員が、老人性痴呆症や老化防止に関するプロジェクト研究や様々な経常研究を進めています。

私の所属する生活環境部門では、土木工学・建築工学・人間工学の観点から、官民の関係機関との連携を図りながら、高齢者の心身機能からみて適切と考えられる物的要素の計画設計条件を調査研究しています。具体的な対象は交通システム・福祉施設・住宅・生活機器であり、最近では、道路案内標識の判読に及ぼす加齢の影響、痴呆性老人の空間認知と設計条件、及び高齢者に優しく安全な製品条件に関する研究を進めています。

2.道路案内標識の判読に及ぼす加齢の影響

高齢ドライバー事故の急増は、心身機能の低下を誘因とする社会問題の1つであります。そこで、昨年度から、建設省土木研究所の協力を

得て、視力・認知反応・照度・走行速度が案内標識の判読にどのように影響しているかを実スケールの実験から明らかにする試みを始めております。その結果、108系という案内標識の判読距離(読み終わった所から標識までの距離)は、高齢者の方が若い方より50~100m短く、高齢者はより標識に接近しないと判読できないことが分かってきております。

3.痴呆性老人の空間認知と設計条件

痴呆性老人の空間認知を知ることは、彼らの残存機能を活かし、介護者の適切な支援環境を模索する上で有用です。そこで、痴呆介護棟を持つ特別養護老人ホームの協力を得て実態調査を行い、その平面構造、各室の壁色や番号表示の条件によっては痴呆性老人の認知を支援することができることを明らかにしております。

4.高齢者に優しく安全な製品条件

高齢者に適した製品条件を把握することは、高齢者やメーカーにとって有益であります。そこで、各種の製品を使って怪我をしたり、ヒヤリとした経験を調べるアンケート調査を実施し、怪我やヒヤリの体験と年齢とが正の関連を示すこと、怪我の部位では下肢が多いこと、怪我やヒヤリの原因は製品の構造上の欠陥、操作の不安定さ・不注意・省略(慣れ)であることを明らかにしております。



写真1 操作力測定装置本体



写真2 監訳刊行物